

語学教育と文学教育の有機的接続を可能にする作問の方法論

George Orwell “Shooting an Elephant”を題材に

中島 勇斗

1. はじめに

本論は、George Orwell の短編“Shooting an Elephant”を教材作成の観点から精読することで、日本の高等教育段階における語学教育と文学教育の有機的接続を可能にする具体的な作問方法を明らかにすることを目的とする。理論的背景として、文学を用いた外国語教育の専門家である Amos Paran の論文を参照し、文学教育と語学教育が乖離した状況が問題視されていることを確認する。Paran は文学と語学の双方に焦点が当てられた教育において求められる教師の役割について“Clearly, providing adequate direction and clear scaffolding is vital. This scaffolding may be provided by a textbook or a reader, but more often than not, it is provided by the teacher” (490)と主張しており、文学を用いた語学教育における教師の「十分な指示」と「明確な足場掛け」を重要視している。こうした教師の責務の提言は、“scaffolding”という教育学の用語からもほのめかされるように、教師が主導する一方通行型の授業を批判し、学習者同士のグループ活動を重視する立場からなされたものである。ところが、そもそも外国語で文学を読む経験に乏しい学生同士にとっては、いきなり知識の伝達なくそうした活動をさせたところで学びは生まれにくい。こうした学習者にとって真に必要な“scaffolding”は、英語で書かれた文学作品の勘所を、中等教育段階で身につけてきた英語力を活かしながら段階的に理解できる問いの存在である、そう本論は主張する。以下では、英文学を学び始めた学部生を対象とし、英語表現への着目を出発点として文学的内容理解へと接続する問いの作成方法を検討する。

2. 教材と方法

素材として、George Orwell の短編“Shooting an Elephant”を用い、読解過程を Pre-Reading、While-Reading、Post-Reading の 3 段階に区分した上で、それぞれの段階での問いの作成方法を具体的に確認する。設問作成に関しては、Elaine Showalter による文学教育に関する理論的著書 *Teaching Literature* を参照し、記憶への定着を促す効果的なレクチャーを生み出すためのポイントのうち “handouts, especially with spaces for students to answer questions, solve problems, or add their own notes” (51-52)という項目にならって、ハンドアウトに設問をつけたものを作成した。

テキストの読解に入る前の Pre-Reading の問いでは、BBC のウェブサイトを活用し、作者である Orwell 自身の伝記的背景や、作品の読解に必要なイギリス帝国主義に関する前提知識を整理する。具体的には、BBC のホームページにおける Orwell のごく簡単にまとめた経歴を読ませ、“Shooting an Elephant”の第 1 段落の中で Orwell の伝記的事実と重なる部分を発見させる問いである。

テキストの読解中に触れる While-Reading の問いでは、英語表現そのものに関する語学的視点を出発点とし、そこから文学の内容理解へと接続する問いを設定する。たとえば、具体的な語彙と抽象的な語彙の使い分け、時制の変化、比較級を用いた慣用表現、指示語、接続後、セミコロンなどに注意を向けさせ、そうした文体的な特徴を手がかりとして、語り手の抱く複雑な心情や帝国主義に対する見解を理解させる設問を作成する。

テキストの通読後に触れる Post-Reading の問いでは、これまでの段階で触れた問いを踏まえて作品全体を俯瞰的に検討する問いを作成する。具体的には、語り手の相反する感情を再度整理し、「ゾウを撃つ」という具体的な出来事が帝国主義という抽象的な問題を象徴していることを考察させる。また、現代の視点から植民地主義やそれを表象する表現をどのように捉えるべきかについて、学習者自身の意見を形成する問いを設ける。

3. 具体的な作問例

Pre-Reading の問いは、BBC のテキストから “He was educated in England and, after he left Eton, joined the Indian Imperial Police in Bruma, then a British colony” という記述を確認し、“Shooting an Elephant”の第 1 段落における “I was sub-divisional police officer of the town” (3)の箇所を発見する。作者と語り手を安易に同一視してはならないことは強調するべきだが、本テキストの語り手には作者 Orwell 自身の経験が反映されていることは作品を読み進めていく上で重要なことである。

While-Reading の問いは紙面の都合上、いくつかを抜粋して紹介する。たとえば、第 1 段落における “When a nimble Burman tripped me up on the football field and the referee (another Burman) looked the other way, the crowd yelled with hideous laughter” (3)という文章に着目させ、語り手がどのような状況に置かれているか、第 1 段落全体を踏まえた上で説明させる問題を設定する。第 1 段落全体では、帝国主義における支配者の立場である語り手が、被支配者である現地人から敵意を向けられている様子が抽象的な語句によって描かれているが、本設問箇所ではフットボ

ールに関する語句を用いてより具体的に語られているのが目立つ。こうした文体的な特徴を確認させると同時に、支配者が被支配者を圧倒するという教科書的な力関係とは異なる、よりリアルな植民地の風土を描いている内容を整理し、反帝国主義の立場にある語り手でさえ、現地人への嫌悪感を抱きかねないほどであるという趣旨を理解する。さらに第2段落における“For at that time I had already made up my mind that imperialism was an evil thing and the sooner I chucked up my job and got out of it the better”(3)を和訳する問題では、単に該当箇所の単語を逐語訳するだけではうまく内容が理解できない箇所を設定し、等位接続詞 for、指示語 this、the 比較級を用いたフレーズといった文法的項目を丁寧に解釈することを要求する。また、同じく第2段落における“All I knew was that I was stuck between my hatred of the empire I served and my rage against the evil-spirited little beasts who tried to make my job impossible”(3)という箇所では、この内容をより具体的に描写した箇所を指摘する問いを設定し、between A and B の構造に着目した上で、続く文章のうち“with one part”と“with another part”(3)という要点並列の構造を発見させ、“Feeling like these”(3)とまとめに入る箇所までが該当することを確認させる。こうした問いを通じて、帝国主義に対する恨みと現地人に対する恨み、あるいはこのテキストで具体的に述べられるゾウを撃ちたくないという思いと、撃たなければならないという義務感といった、アンビバレントな心情を整理する。その他“I should have to shoot the elephant after all”(8)という記述の心情を分析する問いや、ゾウを撃つ際の本文の描写に対応するイラストを選択させる問題など、さまざまな種類の問いを作成したが、こうした問い全ては活動そのものを目的化するのではなく、あくまでも文学テキストの精読を促進する手段として位置付けた。

Post-Readingの問いは、「ゾウを撃ちたくない」という語り手の思いと、「ゾウを撃たなければならない」という語り手の義務感という、相反する2つの内容を再度整理する問いを作成し、一度通読したのち、特定の観点を持ちながら再読する機会を提供する問いになるよう工夫した。また、第3段落における“the real nature of imperialism – the real motives for which despotic governments act”(4)という伏線的な描写に着目し、これまで確認してきた問いを踏まえた上で、テキスト全体で描写されている具体的なゾウに関するエピソードが、より抽象的な帝国主義の問題を象徴していることを確認させる。さらに、本小説テキストにおけるBurmaに関する語句を確認させる問いを設定し、Carter and Longの指摘する文学を学ぶ理由の一つである“The cultural model”(2)の観点を理論的裏付けとして考慮した上で、21世紀に生きる人々が過去の文学作品とどう向き合うべきかを問う、答えのない問いを設定した。

4. 理論的検証

作成した問いについては、Christine Nuttallによる問いの分類を援用して検証を行った。Nuttallは文学テキストを用いた語学教材の問いを①文字通りの理解、②再構成、③推論、④評価、⑤個人的反応、⑥表現方法への着目の6種類に分類し、これらのうち②③④⑥のタイプの問いが学習者自身の読解力育成につながるものとして特に重要視している(187-89)。本発表で作成した問いをこれらの枠組みから整理すると、Nuttallが重視する項目を満たした問いの作成ポイントを概ね満たしていることが明らかになった。

5. 結論

本論では、George Orwellの“Shooting an Elephant”を題材に、語学的な学習と文学的な読解を結びつけるための設問の作成方法について検討した。適切な問いを段階的に配置することで、学習者は英語表現への着目から出発し、作品内容の理解へと無理なく到達することができる。ここで提示した作問例は、言語と文学の双方を豊かに学ぶための実践例として位置付けることができるだろう。本論はそうした教育を行うための第一歩目である。

参考文献

BBC. “History - Historic Figures: George Orwell (1903-1950).” BBC, 2014,

https://www.bbc.co.uk/history/historic_figures/orwell_george.shtml.

Carter, Ronald, and Michael N. Long. *Teaching Literature*, Longman, 1991.

Nuttall, Christine. *Teaching Reading Skills in a Foreign Language*, Heinemann, 1996.

Orwell, George. “Shooting an Elephant.” *Shooting an Elephant and Other Essays*, Harcourt, Brace and Company, 1950, pp. 3–12.

Paran, Amos. “The Role of Literature in Instructed Foreign Language Learning and Teaching: An Evidence-Based Survey.”

Language Teaching, vol. 41, no. 4, 2008, pp. 465–96. *Cambridge Core*, <https://doi.org/10.1017/S026144480800520X>

Showalter, Elaine. *Teaching Literature*. Blackwell Publishing, 2003.